中學國文教科書

修正八版

卷五

375.9
Y019
資料室

41802
教科書文庫
4
810
41-1912
200030
2004

修正八版
文部省檢定濟
大正元年十二月廿四日　中學校國語科教科書

中學國文教科書

吉田彌平編

卷五

東京　光風館藏版

資料室
375.9
Y019

中學 國文教科書 卷五

目次

一 ルーズベルト……一頁
二 氷川清話（口語文）……勝海舟……九
三 南洲遺訓……西郷南洲……一三
四 海と岩……德富蘆花……一六
五 春の品川灣（新體詩）……幸田露伴……一八
六 マレー海の天富……竹越三叉……一九
七 金吾中納言……新井白石……二四
八 杉本九十郎……室鳩巢……三一

廣島大學圖書之印
廣島縣立師範學校
廣島大學 教 26423 圖書

九 水亭に友を招く(候文)……竹越三叉 三四
一〇 樺太談判その一……福地櫻痴 三六
一一 樺太談判その二……福地櫻痴 四〇
一二 四方の海(明治天皇御製)……四七
一三 國體(口語文)……芳賀矢一 四八
一四 海上の孤舟……幸田露伴 五六
一五 鬼作左衞門……新井白石 五九
一六 曾呂利が頓才……湯淺常山 六八
一七 自恃……坪内逍遙 七三
一八 海軍戰死者ヲ祭ル……東郷平八郎 七六
一九 「世界の無線電信」の著者に贈る(候文)島村速雄 七八

二〇 日蓮上人……高山樗牛 八六
二一 西郷隆盛ニ與フ……山縣有朋 九一
二二 城山の嵐(新體詩)……勝海舟 九七
二三 我が家の富……德富蘆花 一〇〇
二四 人工の美と自然の美その一……井上哲次郎 一〇三
二五 人工の美と自然の美その二……井上哲次郎 一〇八
二六 古人の名言……藤井紫影 一一三
二七 國語と愛國心……上田萬年 一一六

廣島大學圖書之印

中學國文教科書卷五

一　ルーズベルト

ルーズベルト、名はセオドル、千八百五十九年を以てニューヨルク市に生る。千八百八十年業をハーバード大學に卒へて法學士の學位を得、尋いでエル、エル、ビーの學位を受け、ワシントン府に出でて內務文官試驗委員となり、海軍書記補に轉ず。米西戰爭の起るや、慨然筆を投じて義勇兵を募り、自ら率ゐて從軍し、大いに名聲を博す。役畢れる後ニューヨルク市の警視總監となり、推されて同市長の職に就き、

*一八五三―一九〇一。

千九百年更に副大統領に擧げらる。翌年九月、大統領マッ*キンレーのバッファロ博覽會に於て兇徒に暗殺せらるゝに及び、直ちにその後を襲ぎて大統領の椅子に凭り、千四百萬方里の沃壤と七千萬の國民とを擁し、十餘億の歳入ある政府の代表者として列强角逐の活舞臺に闊歩すること八年の久しきに及び、千九百九年再選の任滿ちて勇退し、直ちに南阿に猛獸狩の壯圖を遂行して、世界萬衆の耳目を聳動せり。嗚呼彼果して如何なる人ぞや。請ふ少しくその詳を語らん。

彼の祖先はニューヨルク最舊の市民なり。そのこゝに居住せしより八世二百餘年の久しき、連緜相繼ぎ、市の政治・商業と共に彼の家は極めて穩健なる發達をなし來れり。且其の血統の中にはダッチ・スコッチ・フレンチ等の血液を混ぜしかば、彼は生れながらにして市民としての感化教練を享受せるのみならず、父祖より遺傳せる異質の血脈を渾融鎔化してこゝに亞米利加人的新面目を開きたり。

彼のハーバード大學に在るや、善く遊び、善く勉め、運動場に在りては究竟なるチャンピオンとして敵手を畏れしめ、教室に在りては勤勉なる讀書家として儕輩を驚かしたり。運動家としての彼は近視眼のため十分に力を逞しうする能はず、常に防禦の地位に立つことを避けて專ら攻擊の態度を執り、奮進健鬪、勝を咄嗟の間に制するを要訣とせしが、

其の鋒極めて鋭く、曾て彼を破れる敵手をして「若し予にして彼の眼鏡を破らざりしならば、到底勝つこと能はざりしならん。」と自白せしめたる程なりき。

彼は又總べての動物に對して高度の趣味を感じ、殆ど他の學課を忘れて多くの時間を博物室に費し、頻に珍奇なる動物標本を蒐集し來り、之を室内に陳列して無上の樂みとせり。其の讀書に對する嗜好に至りては非常の熱性を帶び、如何なる繁忙の際と雖も嘗て讀書を廢したることなし。

しかも此の嘉すべき趣好は大學を出でて後に益〻醇厚を加へ、千九百年副大統領の候補に立ちて西部諸州を巡回演說せし際の如き、其の激しき競爭渦中に在るに係らず僅の閑暇だにあれば必ず讀書に勉め、大いに西部諸州の政客を驚かしゝが、行李の中には常にプルタークの英雄傳を藏めたりきといふ。

トルベズール

彼は單に優秀なるチャンピオンとして體軀の鍛錬に意を用ひしのみならず、勤勉なる讀書家として知識の新泉を渴求せるのみならず、また誠實に品性の修養を務めたり。彼少時身體極めて虛弱、喘息を患へ、徹宵寐ねざることあり、何人も其の健全に生長すべきを想ひ設けざりしが、健康年と

*四六年頃生る。

與に進み來りて遂に彼の如き身神二つながら剛强なる丈夫漢となりしもの、亦其の嚴正なる道德心の節制に負ふところなくんばあらず。

米國の大統領には屢、偉大なる人才を見る。ワシントンの如きリンカーン(一八〇九—一八六五。)の如きグラント(一八二二—一八八五。)の如き、皆不世出の人豪と稱せらる。ルーズベルトの才德果して此等の人々と鴈行するに足るかあらぬかは今日未だ輒く論定すべからずと雖も、亦決して第二流以下の大統領にはあらざるなり。彼は至誠の人なり、しかも亦沈勇の人なり。彼は血の人なり、しかも亦骨の人なり。其の藹然として掬すべき情操に富める、其の猛然として進んで取る勇氣に饒かなる、はた其の氣宇の卓然として處事の嚴正なる、眞箇に公人の典刑とすべし。彼は實にワシントンの純潔とリンカーンの溫粹とグラントの沈毅とを併せ有せり。唯體を具へて微なるのみ。其のマッキンレーの後を襲ぎて一躍ホワイトハウスに入りしものは輿論の久しく期待せるところにして、彼は初めよりホワイトハウスの成功門を開くべき堅志と活動との鍵をその手中に握り居りしなり。

米國の大統領には、ジェッファーソン(一七四三—一八二六。)以來復文筆の士を出さず、ルーズベルトに至りて初めてこれを見る。彼は學生時代より文才を以て儕輩の間に推重せられしが、今やその著書の公にせられて社會の喝采を博せるもの少なからず。

*一五九九―一六五八。

就中*クロムウェル傳最も好評あり。彼の著書は筆力雄健、精采煥發、爽快なる趣味と溫雅なる感情と沸々として行間に全涌し、讀者をして覺えず肅然として畏敬の念を起さしむ。蓋し彼の筆を執るに當りてや毎に非常なる活氣を以て紙面に臨み、殊に戰爭記などを作るときは意氣軒昂殆ど我自ら吾を忘るゝ槩あり。彼は實に文筆の人としても尙論壇の飛將軍たるべき力量あるなり。

彼今年五十二、春秋なほ壯、氣力正に剛く、その政治家として辣腕を揮ふべきもの寧ろ今日以後にあり。未だ知らず彼果して如何の興味ある英雄的動作を吾人に示すかを。

（奮鬪的生活に據る）

二　氷川清話

勝　海　舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。おれの體がねぢれるならばねぢつて見よ。」といふ料簡で事を捌いて行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落著してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どうせうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。むづかしからうが、たやすからうが、斷行するに限る。若し一度で出來なければ何度でも出來る處までやり通す。兎角世の人は、事業の成功するまでにはや

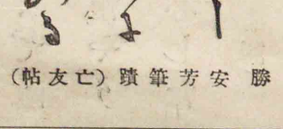
根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。世の中の事は時々刻々變遷極りないもので、機來り機去り、その間髮を容れぬ。かういふ世界に處して、萬事小理窟を以て之に應じようとしても、それはとてもいかぬ。世間は生きて居る、理窟は死んで居る。此の間の消息を看破するだけの眼識があつたのはまづ横井小楠で、此の間に處して所謂氣合を制するだけの膽識があつたのはまづ西郷南洲だ。

勝海舟

*通稱は平四郎。肥後の人。

自分が知人の中で殊に此の二人に推服するは畢竟これがためである。

根氣が強ければ敵も遂には閉口して味方になるものだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、それまで敵視して居つた人の中にも互に肝膽を吐露しあふ程の知己が出來るものだ。區々たる世



勝安芳筆蹟（亡友帖）

*勝安芳、高輪に於て西郷隆盛に會見し、江戸城引渡の談判をなす。

間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。そこに行くと、西郷などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全都鎭撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵味方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の度胸の大きいことには自分もほと〳〵感心した。

（續々氷川清話）

三　南洲遺訓

西郷南洲

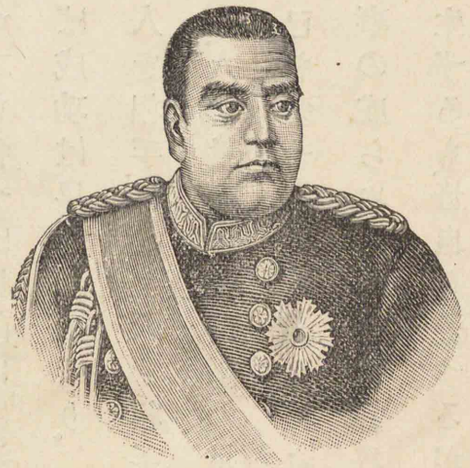
事大小となく正道を蹈み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば後は事宜次第工夫の出來るやうに思へども、策略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、さきに行けば成功は早きものなり。

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし。

己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛せぬものなり。

過を改むるに自ら過てりと思ひ附かばそれにてよし。そ

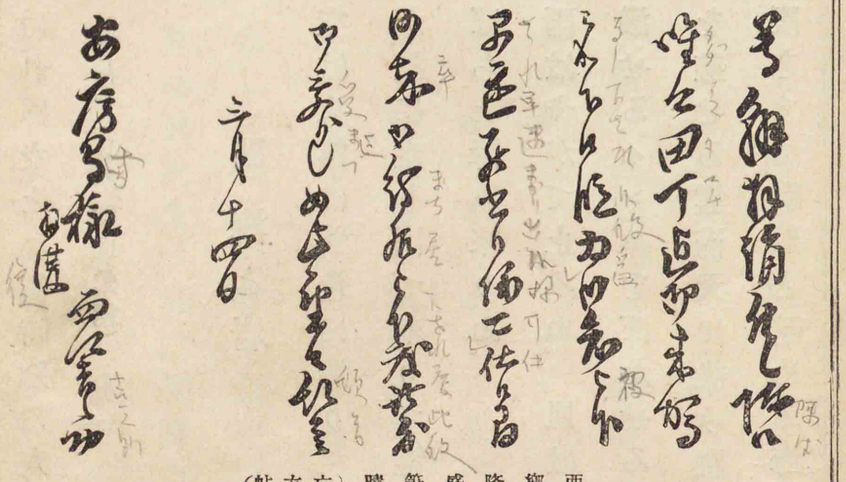
の事をば棄てゝ顧みず、直ちに一歩蹈み出すべし。過をくやしく思ひ、取り繕はんとて心配するは、茶碗を割り、その缺を集め合せ見ると同じことにて、詮なき事なり。



西郷隆盛

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。



西郷隆盛筆蹟（亡友帖）

天下後世までも信伏悅服せらるゝものは只是一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾*我の兄弟のみ今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤

*曾我五郎時致・十郎祐成、父の仇工藤祐經を富士の裾野に殺す。

ければたとひ當時知る人なくとも後世必ず知己あるものなり。（日本倫理彙編）

四　海と岩

德富蘆花

空は次第に紫色に濁りて、生溫き南風面を吹きぬ。漁夫等が、濱に走り出で來りて、忙はしく網を收むるほどに、雨ばらばらと降り來りぬ。

雨はやがて止みぬ。風は愈〻吹き募る。眼を上ぐれば、墨を潑せる、インキをぼかせる、紫色に汚れ、銀色に朧に、樣々の態を盡せる雲、滿天に染み、融け、渦まき、富士も天城も隱れぬ。

凄きまで黙然と暗める海はさながら力士の怒れるが如く

千丈の底より鳴り吼えつゝ、一波又一波、岩を乘り越え、濱を呑み、斷えず休まず、鞳鞳として陸を目がけて押寄す。

見渡せば、海に一の帆影なし。唯、大鷲の嘴をあげ、翼を張れるが如き名島の孤岩の獨り大濤をかぶり、白煙を蹴散らしつゝ、屹として萬波の海中に立つあるのみ。

あゝ海よ、爾の怒は偉大なり。岩よ、爾の意力は偉大なり。古の大人も曾て爾が如く、天を仰ぎて永遠を思ひ、一世を敵として孤高の戰を續けたりき。

風は猶止まず、海は益〻哮りぬ。千波又萬波、碎けても碎けてもまた寄せ來る。彼方の海上に斗出して、剛健粗朴、褐色の衣をつけて一點の青を帶びず、どつかと腰を据ゑて攻め寄

する海に向ふ小*坪の岬を見ずや。人をして當年の相模太郎を想はしむ。（自然と人生）

*相模國三浦郡田越村にあり。鎌倉の東、逗子の西。

五　春の品川灣

幸田露伴

未明

まだきの海の　雲鈍くして、
潮動かず、　東風、力無し。
孤鷗、長夜の　闇を侘しみ、
鳴いて羽たゝく　澪標の上。

日出

空飛ぶ鷗、　鳴く音清らに
物もなき海、　朝嵐吹く。
雲紫に　流れ流る、東。
日は紅に、　燃え〳〵て昇る。（東亞の光）

六　マレー海の天富

竹越三叉

蘭領印度の地たる、島嶼甚だ多し。然れども其の能く開拓せられたるは爪哇本島のみ。スマトラはなほ未開の地多く、マッウラは纔に官鹽を供給するに止り、バンカは支那人の錫山を開けるに過ぎず。其の他の島嶼に至りては、草木榛々、禽獸狂々たり。この閑和蘭人は纔に官吏となりて其の租稅を徵收するのみ。此等の山水によりて封ぜられた

る富庫は未だ曾て開かれざるなり。

セレベス島の一酋長、嘗て瓜哇の在留邦人某氏に黑檀の一大樹を贈與せんことを提言す。但し一の條件あり、之を伐採して船に積むことは之を該酋長に受負はしめよとなり。乃ち人を遣はして之を見しめたるに、其の周圍は三十二人の手を繋ぎて漸く之を抱くべく、亭々として半空に聳え、得て目測すべからず。其の巨大雄偉なる、夐かに聞く所に勝れり。されど之を伐採して船に積まんとせば、まづ黑檀を轉じて海に至らしむる道路を作らんがため、悉く途上の樹木を伐り除かざるべからず。又黑檀は海中に投ずれば石の如く沈下する恐あるを以て、之を浮ばしめんがため、ラングの樹を伐りて筏を作らざるべからず。たとひ筏已に成り、黑檀已に海に浮ぶとも、七八千噸の巨船に備へられたる起重機を用ふるにあらずんば之を船上に引き上ぐる能はず。然るに七八千噸の商船を此の地方に運ぶは到底望むべからざるを以て遂に此の無代價の寶樹を見棄てたりと云ふ。かゝる巨大なる黑檀は森々として到る處に林をなせり。蓋し黑檀の此の地方に於ける、松柏の我が國に於けるが如く、貧民の廁すらなほ此の樹にて造らるゝを見るに及んでは實に驚くに堪へたりといふべし。

右は自然が如何に寶貨をマレー海に封じ、蘭人が如何に之を開く能はざるかを示さんとする一例のみ。その他マレ

ー海島にブリアン樹あり、樹質硬堅にして鋼鐵の如し。歐人之を呼んで鐵木となす。此の樹は從來土人が輕柔、桐の如きランブウ樹と相磨して火を發し、其の火をランブウに受くるの用に供するに過ぎざりしが、火に燒けず、水に腐れざるを以て近年は鐵道の枕木として大いにその需要を增し、廣東・シンガポール地方にては漸く日本の枕木を驅逐して之に代らんとする勢を示せり。又グッタペルチャの樹は數千年の前より榕樹の如く其の液汁を樹下の土中に沒下しつゝあるを以て、今人は唯其の土を掘れば則ちグッタペルチャの護謨を得べし。歐人が苦心して發明したるカンフォルチンキの藥液は、マレー土人が已に數千年來野生樹の液より之を取り、ミテヤボテと名づけて醫藥に供したるものなり。其の他セレベスにはダイヤモンドあり、ミナドには眞珠あり、アンボンなるセーゴ樹は、一本の生ずる所、一家三箇月を支ふるに足る。

以上は貿易表に現れざる一二の事物に就き、如何に天物の暴殄せられつゝあるかを示せるに過ぎず。一言にして云へば山に金玉あり、海に珠璫ありと云ふもの、實にマレー海島の光景なり。若し科學と資本との力を以て之を開くものあらば、卽ち世界最大富庫の鍵を握るものなり。余は蘭領印度を後に見て北歸せんとする時、感慨無限、低回顧望去るに忍びざるものありき。（南國記）

七　金吾中納言

新井白石

*秀秋十六歳にして朝鮮討たれん大將軍を承りて、宗徒の大名數多引具し、都合その勢十六萬三千人、五月二十三日大阪を立つて、同じき七月二日朝鮮に押渡り、釜山城に入る。明くれば慶長三年正月四日蔚山のうしろまきし、眞先に進み、秀秋が手にかけて馬武者十三騎斬つて落す。凡そ打取るところの首一萬三千二百三十八、太閤に獻る。

此の使者、同じき月二十四日伏見の城に馳せ參る。太閤軍の樣を聞召して御感斜ならず在しけるに、石田治部少輔三成竊に申しけるは、「金吾殿の御振舞ゆゝしくも聞えさせ給ふ。さりながら、既に御代官として向ひ給ひし御身の自ら釜山城を出で給ひ深く敵の中に入りて戰はせ給ひしこと、事の體輕忽にこそ存ずれ。この後はかゝる御振舞然るべからざる旨を仰せ下さるべうもや候」と申しければ、太閤實にもと思召したる御氣色にて、秀秋の功を賞し給はず。

秀秋太閤の仰蒙りて城を築くこと九箇所、軍勢をこめ置きて、同じき三月十七日釜山港に船を浮め、四月四日大阪に著き、明くれば五日伏見の城に參る。秀秋に隨ふところの七*人の軍奉行竝に加藤左馬助嘉明同じく參る。伏見にありあふ大名悉く參りつどひ、秀秋の開陣を賀し申さる。太閤やがて御出ありて御對面のこと終りて後、太田飛驒守

*小早川秀秋は秀吉の室北政所の兄木下家定の子、秀吉養うて子とす。天正十九年小早川隆景の養子となる。

*太田一吉。熊谷直陳。早川長政。垣見家純。福原長堯。毛利高政。竹中某。

一吉、秀秋の軍したまひしやう一々に陳べて感じ申す。太閤「いや〳〵、大將軍の自ら諸軍と功を爭ひ、輕々しき軍しけんこと然るべからず。われ秀秋を差向けしこと返す〳〵後悔に思ひき」と仰せらる。秀秋聞きもあへず「世のつねの御使ならんには、幼弱の身などか辭し申さてはあるべき。追討の御使なればこそ仰をば承りたれ。然るに今人々の聞き給ふ處にて、御後悔の旨を承るこそくちをしけれ。秀秋の不覺のことあらんには、軍奉行の人々只今御前にて眞直に申し、速に秀秋が首を刎ねられて御憤を散ぜられんやうにはからふべし」と押返し〳〵申されしかば、太閤御座を御立あつて内に入らせ給ふ。

(一)杉原下野守長房。
(二)山口玄蕃允宗永。

治部少輔三成參りて秀秋の老(一)杉原下野守・(二)山口玄蕃允に向ひ、「大殿の御氣色よからず、まづ御館に歸し入れ參らせらるべし」といふ。秀秋聞きてしやくび打ち落さんとする氣色にて打刀取つて立つ。德川殿引き止め給ひ、とかく制してかの館に伴ひ給ひしに、太閤の御使として尼孝藏主入り來り仰を傳ふ。「そも〳〵去りし頃、蔚山の戰に輕々しき振舞し、又只今の申し條甚だ奇怪の至りなり。須く早く筑前の國を還し獻りて越前の地に移るべし」とありければ、中納言大いに怒りて「やあ、尼前、秀秋が身に國奪はれん罪覺えず。命あらん限りはたゞもとのまゝにこそあるべけれ。『速に首を刎ねらるべう候』と申せ、尼前」とて追つかへさる。

徳川殿、孝藏主にむかひ給ひ、『仰、謹んで承りぬ。』と宣ふとこそ申さるべけれ。」とありければ、尼前承り、「此の上は内府の御はからひにこそより候べけれ。政所の御方へも其の由を申すべきにて候。」と申して罷り出づ。

徳川殿秀秋にむかひ給ひ、「只とにもかくにも仰に從ひ給はんこそあらまほしけれ。政所の歎かせ給はんには、太閤もさのみ心強くはおはせじものを。」と仰せければ、「さらば秀秋自ら三成が首切つて後内府の仰にこそ任せ候はめ。」と申さる。徳川殿も今は仰せらるべきやうもなく、杉原・山口を私に召され、「先、家人少々越前の國に下さるべし。」と仰せければ、外様の侍少々をさし下す。

前田利家。

かくて徳川殿、大納言利家*と共に秀秋の事御なげきあらんとありしかども、利家辭し申されしかば、徳川殿日々に太閤に參り給ひつゝ殊に仰せ出さるゝ旨もなし。太閤「いかにかくは毎日見え給ふやらん。」と仰せければ、「秀秋の國移されんことといたはしう覺えて、此の由申さんとて參り候へども、えこそ申出もし侍らね。」と答へ給ひて、その後も日々參り給へば、太閤又はじめの如く仰せければ徳川殿の答へ給ふやうもはじめの如くなりしに、太閤「さほどに思ひ給はんには、内府のはからひに任せまゐらすべし。」と仰せければ、徳川殿喜ばせ給ひて、秀秋のもとにむかひ給ひ、杉原・山口召して越前に下りし侍ども召還さる。

ほどなく六月二日に徳川殿秀秋を打連れ參らせ給へば、太閤御對面あつて饗宴の儀事終り、秀秋に物多く賜ひ、又徳川殿にも引出物ひかる。

*秀秋、この日長崎伊豆守を徳川殿へ使として、「この度の御芳恩何れの時にか忘れ候べけん。報じまゐらすべき時こそ侍るべけれ。」と申されたり。（藩翰譜）

*慶長五年九月十五日關ヶ原に裏切して東軍に應ず。十七日佐和山を攻めて石田が一族を滅す。

八　杉本九十郎

室鳩巣

加賀の國に杉本何がしとて、ひとりの微賤の士あり。余其の人を久しく相知れりき。其の子九十郎といふもの、十五歳の時、父はあづまへ行役したる其のあとに、年輩同じ程なる近鄰の人の子と圍碁の上にて口論したるに、九十郎こらへず、刀を拔いて相手を一太刀きりしを、かたへの人に抑へられけり。さて其の事廳に達して後、相手の創療治せさすべしとの事にて、其の間九十郎は官長の家に預り置きしに、聊か臆したる氣色もなく、言語振舞の落ちつきたるはなかなか年におはぬやうに見えけり。

日を經て相手終に創にて果てけるにぞ、九十郎も切腹するに議定しける。その前の夜、主人名殘ををしみつゝ、酒肴いろいろ用意してもてなしけり。九十郎は母への文など認め置き、さて主人にくはしく謝詞を述べ、此の程附き居たる家人へも、それ〴〵にねんごろに暇乞して、さていひけるは、

「面々へ名殘も惜しく候へば、今宵は明くるまでも語りたく候へども、明日切腹の時ねぶたく候うては、いかゞと存じ候へば、先へふせり候べし。面々はこれにてゆる〳〵と酒すすめられ候へ。」とて奥に入るかとすれば、やがて高鼾していぬるを聞いて、跡に居たりし人々感じあひけりとぞ。

又次の日つとめて、よき程に起き出でて沐浴し、衣服改めつつ、用意心靜かにし、其の後切腹の席へ出でて檢使に一禮し、こゝろよく切腹しぬ。其の有様、從容としてやすらかなり。いかなる勇烈老功の士たりといふとも、是には過ぐまじと見えきとて、其の場に有合しゝ人々、年を經て後までも語り出して、涙落さぬはなし。

此の事起りし始めに、余彼が父のもとへ文やりて知らするとて、「九十郎たとひ切腹するに及びたりとも、此の程のおとなしさにては、未練なる事あるまじ、それは心安く思ふべし」。と言ひ遣はしけり。後に聞けば、父その文を人に見せて、「かくは言ひて來たれども、わらはべに灸するに、前には人にすかされて、思ひの外におとなしく見ゆれども、火を取りてむかへば、そのきはになりて、俄に泣き出して前の言葉には似ぬものぞかし。わが子も未だ年に足らねば、いさぎよく切腹したりといふたよりを聞くまでは、心もとなく思ひ侍り。」といひきとぞ。古人のいへるごとく、此の父なくば此の子あらじとなん思ひし。（駿臺雜話）

九　水亭に友を招く

竹越三叉

東籬菊垂枝落花日照之句
昨今此風物を説き来りて餘すなき如き
想ふ唐も亦の天地の宇宙は一つ一つ
此伴侶を求めつゝ　紀悠也氏を起し氏の際
水亭にて樽を欸乃の一会を
催し　古今人物を評し　浮世の興衰
むも亦妙ならん　時曜日午前九時より清風亭
に集合されたく　以上

*唐の李建勳の句。

手に東京地方の新聞紙を見て
案に曰く　此の如き同人も野に在りて
中にては出でざるべからざるの而去
きは縦横の鬼手世界数あるべからざるの而去
て亀も衒才の氣なきを嘆ずし時氏の
傳子中の面倒屋にて最初に談話を聞く呼吸
ものなり　之れを招き一講ずべし　不可

（三叉書翰）

一〇　樺太談判　その一

福地櫻痴

幕使の一行は英・蘭・孛三國を巡りて何れも開港延期の承諾

を得たりければ、ステチンより露西亞の軍艦に乘り移りてセント、ペテルブルグに至り談判に及びけるに、延期は固より露國政府にて承諾したりしかども、こゝに困難なるは樺太境界の談判にてありき。

抑、この境界は往年露國よりプーチャチンに全權を授けて日本に申し込みたりしに、その要領を得ず、その後またムラビョフ伯を使節に命じ、全權を與へて日本に派遣したりし時にも、日本はその言ふところを主張して更に境界を定むることを肯んぜざりき。 さればこの度の日本の申込には應ずることを好まずと雖も、折角の使節なれば、枉げて談判せしむべしとて、露國外務大臣ゴルチャコフ公は亞細亞事務總裁イグナチエフ伯を全權に命じてその談判に及ばしめたり。

(一) 一八四五―一九〇〇。

(二) 一七八八―一八八三。

*一八三二―

幕府の三使は飽くまで北緯五十度境界説を主張して、「この境界は萬國の地理學者が公認する所なり。」と述べたるに、イグナチエフ伯は嘲り笑つて、「地理學者の學説や地圖の色分けは決して政治上の證據とするに足らず。 若し地理學者の説に從はゞ、サガレンといふ名も滿洲語たり、現に貴國にて樺太と稱ふるも唐人の轉訛にあらずや。 又地勢上より論ずれば、樺太は日本の地にあらずして寧ろ滿洲大陸に屬する地勢なりといふこと學者の定説なり。 さて又地圖は歐洲諸國にて勝手に色分けをなし、その中には五十度を以

て境界としたる貴説の如きもあれば、五十一二度若しくは四十四五度のものもあり、又全く日本に屬せしめたるもあれば、之に反して全く露國に歸せしめたるもあり。御所望とあらば、それらの地圖何十百幅盡く取り出して貴覽に供すべきか。然れども露國はさる迂遠なる學説を證據には致さず、常に實際の政治問題として談判に渉るべし。それ兩國の境界は山嶽又は河流の地勢に據りて定むべし。徒らに經緯度を以て劃する時は、そのため實地の境界に不都合を釀して卻て將來の紛議を招き、寧ろ境界を定めざるに若かざるの恐あり、これ一つ。次に露國は貴國の説に從ひ、既に境界を定めずして共領の姿となせば、今更不都合なる境界を定むる必要を感ぜず、これ二つ。次に露國の移住民は現にサガレンに於て五十度以下の處まで南下せるに、貴國人民は纔にその南方の海岸に於て漁獵を營めるのみにて、曾て一人の五十度内外の内地に住居するを見ず、これ三つ。この三箇條の事實あれば、露國は五十度の境界は素より承諾すること能はず。然るに、四十八度内外の處には河流と山嶽とありて天然に自ら境界をなせる地勢なり。此の山河を以て境界に定めば、地境劃然として將來の紛議もなく、貴國のためには十全の利益なるべし。この議は露國に於て欲する所にはあらざれども、使節に對してその面目を全うせしめ、以て露國が貴國に對する好意を表するため

に枉げて承諾すべきが如何に候ぞや。」と演べたりけり。

一一 樺太談判 その二

福地櫻痴

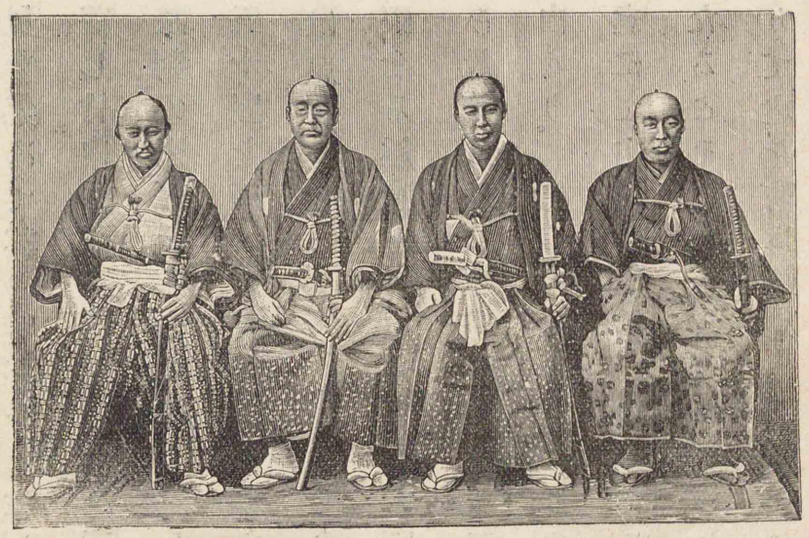
（懷往事談）

竹内下野守は蝦夷地の實況を詳知せる人なりければ、露國全權委員イグナチェフ伯がいへる如く、樺太北緯五十度内外の處には一の日本人も居住せず、又事實に於て日本の政令の行はれざる處たるを識れり。松平石見守は慧眼にして多少外交談判に經歷ある人なりければ、五十度境界説は到底露國に於て承諾せざる問題たることを識れり。依つて京極能登守にも謀り、*組頭の意見をも聞き、終に隨從の諸

*組頭柴田貞太郎、後に日向守と改む。

員を集めて其の所存をも尋ねられたり。

蓋し竹内・松平正副兩使の趣意は、「我等當國に於て樺太境界談判の全權を承つて罷り越し、既に其の議に渉れるに、到底五十度を以て日露兩國の境を劃せんことは行はるべしとは思れず。フーチャチン・ムラビョフ兩使が前年より主張せる趣意といひ、今また露國全權が辯論するところといひ、最後の目的は樺太全島を己が所領となすの望たるは明白なり。然るに此の程よりの談判に於て、四十八度内外の處にて山河の形勢に由つてその境界を定むべしと發議したるこそこの上もなき幸なれ。我等兩人は一歩を彼に讓りて之を諾し、將來に動かすべからざる公の約定書を取り



柴田貞太郎　京極能登守　竹内下野守　松平石見守

（東京帝室博物館藏）

かはし、以て他日の葛藤を絶ち、樺太南部の地を安穩に維持せんとは思ふなり。依つて速に露國全權委員に對しその決議に及ばんずる所存なり。」といふにあり。京極は之に反對して、「樺太境界談判の全權は我等三人御委任を蒙つたれども、*對馬守殿より、『余が

*老中安藤對馬守。

在職中に於て日本の土地を一寸たりとも讓與することを欲せざれば、その旨相心得て談判せらるべし。』との內訓あり。然るを五十度を退きて境界を定めんこと、此の內訓に背くのみならず、實にわが日本國に取つて再び回復し難き國損なり。故に拙者は同意することを肯んぜず。」といふにありて一條の大議論と相成りたり。

兩使は慨然として、「今日の機會一たび失はゞ決して再び得ることと能はざるなり。我等兩人は日本國將來の計を思ふが故に、閣老の內訓を顧みず、將軍家より公然に與へられたる全權を以てこの境界を四十八度の邊に定めんとは欲するなり。歸朝の上その御咎を被らば、我等兩人切腹して申

譯を致すべし。國家の御爲に身命を棄つること固より覺悟の所なり。」と演べたれば、京極も亦憤然として、「一命を棄つるに於ては拙者とても何ぞ公等に劣るべき。但し日本の國辱・國損は我等が瘦腹幾百切つたりとて取り返しの附くべきものにあらず。拙者は飽くまで内訓の旨を守り、全權御委任外に出でて境界を定むることに同意せず。然るに强ひて約定せんとあらば、御目付の職權を以て差止むべし。勿論その談判にも列席せず、約定書にも記名調印せざるべし。」と論じて各其の説を主張したり。よつて組頭以下各勘考を盡したる上にて意見を三使に申し立つべしとの事にて、その日の會議を散じたり。

さてこれよりして右の兩議の中にて孰れを採らるべきかと隨行員中區々の評論となつたりければ、青年少壯にして外國の事情を知れる輩は兩使の説に贊成し、又一方の老練實著を得意とせる俗吏の輩は京極の説に同じ、各見るところを取つて動かず、右に説き、左に論じて、是非を爭ひ、或は口頭を以て、或は書面を以て、所見を三使に陳述したり。然れども組頭柴田氏は初めより斷行を不可とせる人なりければ、頻りに利害を説いて兩使を諫め、加ふるにこの一行にて外交上尤も老練の才ありて顧問に備りたる*森山氏も熟考の上にて遂に不斷行説を採りたるにより、數日の評論の後に竹内・松平の兩使も京極の不同意を壓伏する術なければ、

*森山多吉郎 長崎の人、蘭學に通ず。

歸帰の懷大なり

その持説を枉げて不斷行説に從はれたるぞ實に殘念至極の次第なる。嗚呼當時兩使が斷行説を立てられたる時に於て、御目付に異議なく、組頭以下皆これを贊成したりしならば、兩使はこの時を以て四十七八度の處に於て日・露兩國の境界を定め得て實にその拔羣の績を後世に遺したるべきに、異議のために其の目的を達するに由なかりしは、幕末千載の遺憾ともいふべかりしなり。（懷往事談）

一二　四方の海　（明治天皇御製）

○

四方の海みなはらからと思ふ世に、
など浪風のたちさわぐらん。

○

子らはみな軍のにはにいではてゝ、
おきなやひとり山田もるらん。

○

暑しともいはれざりけりにえかへる、
水田にたてるしづをおもへば。

○

あさみどりすみわたりたる大空の、
ひろきをおのが心ともがな。

○

いそのかみふるきためしをたづねつゝ、
あたらしき世のこともさだめん。

一三　國體

芳賀矢一

獨逸留學中、天長節の祝宴に、男爵シーボルト氏の演說を聽いて、感じた事がある。それは、「西洋各國の革命は國王に對する不滿から起つて、其の結果はいつも王室の權威を縮少し、或は全く王室を顚覆するのであるが、日本では之に反して、改革毎に皇室の稜威を益し、繁榮を增進する。」といふ說であつた。これは、如何にもよく我が國體の萬國に異なることを言明したものである。

彼の大化の改新といひ、明治の維新といふ如き政治上の大變動は我が國なればこそ極めて容易に成就したのである。新しい文化に接して之を採用する必要の生じたとき、制度改正の詔敕が一度煥發すれば、祖先以來の領土・領民も差出し、既得の權利も悉く打棄てゝ、唯々諾々として大命を承るといふことは、決して外國には有り得べからざる事實である。これでこそ我が國民は萬世一系といふ國體を維持し、時代の進步に伴つて進步したのである。かういふ場合には、外國では必ず國王と人民との衝突を免れぬ。衝突して國王が散々な目にあはされた例は枚擧に遑なきほどである。

元來、革命といふ語は、易に「湯武革命、順乎天而應乎人。」とある語より出たので、支那人は、昔から、天子は天の命を受けて百姓を治める者といふ思想をもつて居るゆゑ、聖人・賢者たるが爲に歷代二十四朝、長い朝廷でも七百年とは續かぬ。その時には天の命が革つたものと覺悟して、平氣で新しい天子を戴く。かういふ國々には、決して大化の改新や明治の維新のやうな改革が行はれる筈はない。

西洋諸國の帝王も支那の天子も、國民の間から起つて、或は權力を以て、或は輿望によつて、遂にその位を贏ち得たのである。素生を洗ひ、祖先を正せば、同等の國民である。これが他の國民の王室に對する考であらう。日本人は皇室を我々國民とは一種別なものと見て居る。支那には「王侯將相寧有種。」といふ語があるが、日本人は、帝王の位は國民の決して覬覦すべきものでないと考へて居る。長い歷史の中には、皇室にむかつて弓を引いた者も無いでは無いが、天子の位を覬はうといふやうな考は決して無い。

大日本史には、源義朝や源義仲が叛臣傳に入れてある。これは天子に向つて敵對した事の大義名分を正したのである。此等の人は、多くは朝廷の或官位を得ようとして、それが得られぬ爲に、騷動を起したので、皇室を覆さうなどいふ考は毛頭もないのである。叛臣と雖も、朝廷の尊さをば忘

れぬのである。平將門も檢非違使になれなかつた爲に謀叛したのである。唯一人、弓削道鏡といふ坊主が、佛法・王法を一つにして自分がその位に坐らうといふ不屈な料簡を起したが、忠誠な臣民の聲は宇佐八幡の神託となつて、忽ち之を排斥した。其の外には一人も無い。

藤原氏が廢立を行つたといつても、自分の女の生んだ皇子を皇位につかせたいといふ欲望なので、これが卽ち人間としての最大欲望であつた。その欲望さへ達すれば、

*この世をば我が世とぞおもふ、望月の
　かけさることもなしと思へば。

といつて大滿足をしたのである。

*藤原道長の歌。

平清盛は利己主義の結晶で、入る日を招き返したといふ傳說のある程であるが、これとても、平氏といふ家柄で太政大臣といふ人臣の極位に上つたのを家門の大名譽と信じたのである。我儘が募つて法皇を幽閉しようとした時、小松內大臣重盛が、

いかにいはんや、先祖にも未だ聞かざりし太政大臣を極めさせ給ふ。謂はゆる重盛が無才愚暗の身を以て蓮府・槐門の位に至る。しかのみならず國郡半ばは一門の所領となつて、田園悉く一家の進止たり、これ稀代の朝恩にあらずや。

と諫めたので入道もよわり切つて其の言に從つたのであ

る。

承久の役には、北條泰時がわざ〳〵途中からひきかへして、若し道のほとりにも、圖らざるに、辱く鳳輦を先立て、御旗を擧げられ、臨幸の嚴重なる事も侍らんに參りあはゞ、其の時の進退如何侍るべからん。此の一事を尋ね申さんとて一人馳せ歸り侍りき。

といふに對して、義時は、

かしこくも問へる男かな。その事なり。まさに君の御輿にむかひて、弓引くことは如何あらん。さばかりの時は、兜を脱ぎ、弓の弦をきりて、偏にかしこまりを申して身をまかせ奉るべし。

と答へた。

足利尊氏にしても唯征夷大將軍だけの野心で、もとより皇室を覆さうなどといふ非望はもたなかつたのである。我が國の戰亂を支那歷代の變亂などと同樣に見るのは、大きな間違といはねばならぬ。如何なる惡人でも謀叛人でも、皇室を尊ぶ考は必ずもつて居たので、支那や西洋諸國の人民の樣に、折がよければ取つて代らうなどといふ考は毛頭微塵ないのである。

これが外國人の眼からは不審に見える。我が國民の性質を知らぬ人の眼からは、萬世一系といふことが如何にも不可思議に感ぜられる。世界に唯一であるから、もとより不

思議には相違ない。ブールボンだの、ホーヘンツォルレンだの、ロマノフだの、劉氏だの、李氏だの、愛親覺羅氏だのと、外國の朝家にはそれ〴〵姓や朝號があるが、我が皇室にはそれが無い。こゝの道理がわからなければ、日本の歴史を理解することは出來まい。「開闢以來、君臣の分定まれり。」といふことは、別段歴史上の説明を待たず、有史以前から我が民族の腦裏に浸み渡つた金言である。（國民性十論）

一四　海上の孤舟

幸田露伴

十九日の朝起き出でて見れば、足の痛みは異ならねど、頭の重きはやゝ薄らぎたり。いざとて朝餉を終ふるすなはち車を儆ひて此*の地をたち出で、綠川を越えて宇土に至り、宇土より松橋といふ船つきの淋しき町に到り著きぬ。このあたり人力車の轅（カヂ）皆象の牙のやうに天仰ぎて反れるを友と怪しみ噂しけるに、今また薩摩の米の津まで海路二十五里を越ゆべき筈にて儆ひたる舟の來るを見れば、こはいかに、長さ四間にも足らざるべき小舸なり。處の習にて車の形、舟の式の異なるは言ふにも足らねど、煙波淼々として島山遠く蜿蜒たる外には眼を遮るものもなきこの灘をかゝる舟にて渡らんこと、父母ある者のなすべきことかとしばし怪しみ迷ひけるが、旅人は皆これにて渡る習なりといふに、聊か心強くなりて、遂に乘り込みたり。

*熊本市。

初めは風乏しくして舟の行くこと極めて遲かりしが、暫くして强風起りければ樋島・天草上島の間に避けたり。石灰燒けるが見ゆる迫門を出で果つるころほひより、よきほどに風蓬々と吹き出し、十分に張りたる白帆の破れもするかと見ゆるまで膨らみ孕みて、少し傾きたる船の舳先の水に突き入るばかり烈しく浪を截つて進む快さ、駿馬に鞭うちて曠原を馳するとはまた異にして趣あり。

水股の沖を過ぐる頃、太陽西の方に沈めば、雲は赤金の色なして輝き、浪は鎔けたる鐵の焰を揚げて流るゝが如し。「面白の眺かな、歌も及ばじ、畫も及ばじ。」と友と共に舷を拍つて賞歎する間もなく、日輪全く沒りて暮煙蒼然と海上を罩め、舟の中の隅々次第に薄昏くなり、浪の頭の雪を卷くやうなるばかりぞほの白く見えぬる。さすがに漁火も見えず、行きかふ舟に逢ふこともなき海上の孤舟にて、うば玉の暗き夜に入りたる、何となく心細く、舟子の吸へる煙草の火の唯一點此の暗の中に赤く見ゆるなど、詩興として自らをかしと思はざるにはあらねど、實は少しく愴然として物言ふこともなくなりゆきたり。夜更けてやう〳〵米の津につきぬ。旅宿を擇ぶ暇もなくて舟子の導くがまゝにいとゝいぶせき家に宿る。（露伴叢書）

一五　鬼作左衞門

新井白石

天正十二年小牧に陣し給ふ時、重次伊勢の國星崎の城を守る。蟹江の城を攻められしに、先陣して城を攻め落す。やがて秀吉・信雄中直りし給ひ、信雄に就いて於義丸殿を養君とし給ふ時、重次が子仙千代丸も石川伯耆守數正が子と同じく附けて參らす。抑、此の於義丸殿と申すは徳川殿の御二男、故あつて生れ落ちさせ給ひしより、重次とりて養ひ參らす。此の年十一になり給ふが、都に登らせ給ふ事を御名殘惜しく思ひしかば、我が獨子にして愛しける仙千代丸つけて參らせたり。秀吉もうへには於義丸殿を養ひ參らするとは披露あれど、内々は人質とし、徳川殿に親しくならん謀にてありければ、「本多は殊に彼の家の譜代のおとななり、其の子を參らせしことこそ嬉しけれ。」と、悅び給ふこと斜ならず。

成重。

家康。

さる程に、秀吉正二位内大臣に歷上り、關白の職になつて、於義丸殿にも元服せしめ、秀康と名のらせ、從四位下左少將兼三河守に任ず。信雄卿を媒とし、徳川殿御上洛の事を勸め給ふこと度々に及べども上り給ふべしとも聞えず。依つて三河守殿も失はれさせ給ふべしなど風聞す。三河守殿の御母*此の事を聞き給ひ、「守殿失はれ給ひて後一日も世にながらふべしとも覺えず。死なば一所にこそ死なめ。」とて、忍びて大阪に上らせ給ふ。重次「いや〳〵仙千代丸都に置いて人の疑受けんことも詮なし。たゞ一人ある子失はれ

*長勝院永見氏。

んも不便なり。」と思ひければ、「母がいたはり以ての外に候。暫しの暇を賜はつて此の世の暇乞をも仕らせばや。」と守殿へ申して呼び迎へぬ。幾程なく石川伯耆守數正は德川殿に背きて秀吉の御方に參る。さてこそ重次が二心なき所顯れて誠に思慮深くは見えけれ。

かくて關白殿の仰にて「仙千代丸とく參らすべし。」と守殿よりの御使度々に及ぶ。重次もせんかたなく、「是もいたはる所の候。且は母が病も年頃此の子戀ひ慕ひしゆゑなれば、今更參らすべしとも覺えず。」と伏し沈み歎きぬ。「されば息男が身がはりに此の者參らする。」とて甥の源*四郎富正を參らす。關白殿、「安からぬ事なり、本多めにたばかられたり。」と

*本多富正、重富の子、重次の甥。

怒り給ふこと大方ならず。

かゝりし程に、また東西の軍起りなんと聞えて、宗徒の御家人の中岡崎の城守るべきものを選ばる。本多佐渡守正信承りて、「此の城を枕として討死仕るべき者に仰せ付けらるべし。」と申しければ、やがて重次召されて、岡崎の城を賜はり、數百騎の兵を屬けらる。此の時重次が御暇乞申し、氣色、生きて再び見參すべしとも見えざれば、其の志を感ぜさせ給ひて、息男成重本領安堵の御書をなし下さる。

關白殿いかにもして德川殿と親しうならんと色々に謀を廻らし、がてまた其の妹君を德川殿の北の方に參らせられしかば、德川殿「此の上は見參なくては叶ふまじ。」とて御上

井伊直政。
大久保忠世。

洛あるべきに極まる。「御家人等が危く思はんところも侍るゆゑ、都に御逗留あらん程はそれに留め給ふべし。」とて大政所を下し給ひしかば、岡崎の城に入れまゐらせ、重次これを守る。　井伊・大久保も同じく御後にとゞまる。

此の時重次下知して大政所のおはしますほとりに薪を積むこと山の如し。「こはそも如何なる事ぞ。」と驚き、大政所の御供せし女房たち、はした女して薪つむ下部男一人招き、酒など飲ませ、心能くとりて、さて「何事にかこの程日々にかく薪をば積むことぞ。」と問へば、「いかなることとも下郎は如何で知り申すべき。　たゞ承る所は關白殿が我が國の殿を失ひ給ふか、若しくは留めまゐらせて返し給はずば、今度都より御下りあつてこれにましまし御方を盡く燒き殺し申さん料の薪とかや申して、本多殿の下知として日々に山林より伐つて來り候が、この本多殿と申すは極めて氣の短き人にて、殿の御歸遲し〳〵と待ちかねて、けさ火を附けう、晩に燒きたてうとせられ候を、井伊殿や大久保殿が暫し〳〵と制し給へばこそ今まではかくて候へ。『痛はしや、美しき都上臈の今のうちにも灰土とならせ給はん事の無慙さよ。』と下郎等は申すことにて候。」といひしを、女房たちかくといへば、「あな悲しや、その本多といふ男が日々に參りて恐しげなることわねにて、『家康より茲につけまゐらせて候、御用の事あらば承りなんず。』といふ。　今思ひ合すれば三河守殿の始め

*高力清長。天野康景。本多重次。

て御參ありし時、仙千代丸といふ兒の御供したるを殿下の御覽じて、『あはれ家康がうちにて三奉行とかいふうちの鬼作左衞門といふものゝ子ぞ。』と仰ありしかば、『恐し〳〵。鬼も子を生むにや、鬼の子は如何なる者にか。』とて物越しに人人見たりしに、其の親の鬼ならば、さこそはあらめ。されば こそこれへ參る度毎に、『家康歸り候はんとの事は未だ御沙汰も聞え候はずや。』とをとゝひもいひしぞ、けさもきのふもいひしぞ。待遠にや思ふらん。あはれ家康疾くしてかへさせ給へかし。』と泣きくどきて、此の由を大政所へ申しければ、大いに驚き歎き給ひて、日々に御消息ありて、『德川殿をとくかへさせ給へ。こなたの有樣のいぶせき、いつの世にか

*秀吉の妹。家康の室。

は忘るべき。』など、ありし事どもこま〴〵と仰せ遣はされしほどに、程なく御歸國まし〳〵大政所歸りのぼらせ給ひければ、女房たち涙を流し、『情なくも御母上を下し給ひしものかな。鬼本多とかやがかくこそいうたれ、とこそ計らうてさむらひつれ。今は朝日の姫君をまゐらせ給へば、德川殿の御爲にも大政所は母上にて候を、如何に鬼なればとて己が主の事知らぬ事や候べき。それにかく辛き目を見せ參らせて侍れば、はや〳〵德川殿に仰せられて、如何なる罪にもあはせて大政所の御恨をも晴らさせ給へ。』と、とり〴〵に訴へければ、關白殿笑はせ給ひて、『家康はよきものども數多召し使ひけり。秀吉もそのごとき家人をばほしき事に候

ぞや。」とばかりのたまひて御座を立たせたまひきとなり。

（藩翰譜）

一六　曾呂利が頓才

湯淺常山

堺の鞘師始めて太閤に謁しける時、太閤「汝の姓名は何と申すぞ。」と問ひけるに、その者の答ふるやう、「臣が姓名は卽ち曾呂利新左衞門と申し候。」太閤「奇なる姓もあるものかな。して、その曾呂利と申す姓には何ぞいはれにてもありつるものなるか。」と問はせけるに、又答ふるやう、「聊かいはれこれあり候。別儀にあらず、臣の拵へたる鞘は堅くしてそろりと入り、敢てつかへず、こゝを以て曾呂利と申し候。」太閤こは奇なり。又折節來らるべし。」と。

他日又太閤に謁しけるに、太閤問うて曰く、「汝の姓名は何とか申したりな。」答へて曰く、「曾呂利曾呂利、新左衞門新左衞門。」太閤怪しみてその重言を尋ねけるに、新左衞門の答ふるやう、「殿下曩に臣の姓名を問ひ、今また重ねて問はせたまふ。故に臣も亦殿下重問の意に從ひ、同じく重言を以て答へ候なり。」と。

新左衞門或時太閤に向ひ、「願はくは一日御耳の香を嗅がせられたし。」とありければ、太閤は訝しく思ひ、「此奴又何をかなすらん。」と疑ひしが、「何はともあれ、宜し、汝がよきに嗅がれよ。」と許されけり。かくて、新左衞門、諸大名の御機嫌伺に出づ

る時を窺ひ、太閤の耳元に口寄せて何やら言ふ體なれば、皆皆心中密に驚き、「彼奴何を言ふらんか。若しや我を讒言するにはあらざるか。」彼奴は頗る殿下の寵愛する所なれば、彼奴が言ふこと御用ひあらんも測られず。」と憂へ、各わが屋敷に歸りて、早々數多の金銀財寶を調へて密に曾呂利が方へ贈りけるにぞ、數日にして金銀財寶山の如く集ひける。

新左衞門やがて、太閤の御前に出でて謝していひけるやう、「殿下一日の御耳を拜借し、その芳しき香を嗅ぎたる效能によりて、金銀財寶山の如く集ひ來りて殆ど坐する餘地これなく候。是全く殿下の御耳の效能なり。」とありければ、太閤も亦呆然として驚きけりとなん。

或日のことなりしが、新左衞門太閤の機嫌を取り、頗るその效ありけるほどに、太閤の申しけるに、「何なりと汝の望めるものを賜はせん。」とありけるに、新左衞門言へるやう、「臣敢て大いなる望もこれなく、唯紙袋二箇ほど米を賜はりたし。」太閤、「そはいと〳〵易きことなり、あまり寡欲ならずや。」と仰ありけるに、新左衞門、「これにて澤山なり。」と申して退出せしが、やがて二箇の紙袋を張り拔き、數十百人を雇ひ來りて太閤の御前に出で、「前日御約定の米これに賜はりたし。」と米倉二戸前を蓋うたりけるにぞ、さすがの太閤もこれに呆れて暫しは言葉もなかりける。

又ある日の事なりしが、太閤嘗て數多金銀の蟹を造らせ、こ

れを庭の泉水或はその近傍に放ちて樂みとなしけるが、程經て見厭きたりとて、近習の者に「何にても一用をいひ出づる者にはこれを與へん。」と申されけるにぞ、皆々大いに喜び、「臣はこれを紙押になさん。」といひ、或は「茶釜の蓋のつかみになさん。」といひ、或は何といひ、かといひて、各一箇を賜はりしのち、新左衛門の請ふやう、「臣は人間の相撲も既に見厭きしことなれば、この蟹を集へて相撲を致させんと存ずるなり。」といひければ、太閤「相撲とありては五箇や十箇にてはその興薄かるべし。悉く持ち行くべし。」と。殘れる蟹を皆新左衛門に與へけりとなん。その頓才實に驚くべく感ずべし。

（常山紀談）

一七 自恃

坪内逍遙

英佛の艦隊のナイル近海にて將に會戰せんとせし時の事なり、英の水師提督ネルソン*は諸將を旗艦に集めて豫ての戰略を示しけるに、大佐ベリー喜びて曰く、「若し此の戰略によりて勝つことを得ば、天下の驚歎いかばかりならん。」と。提督曰く、「若しとは何ごとぞ。勝利は確實なるを。但し誰が生存して其の情況を報ずるかは別問題なり。」と。ネルソンが自

ネルソン

*一七五八―一八〇五。

ら恃むことの如何に厚かりしかを見るべし。

成功の要具一二のみならざるなかに、自ら恃むの德は其の最も緊要なるものゝ隨一なり。彼の「自ら助けよ、天汝を助けん」といふ古語の意を體し、他人の助を俟たずして專ら自己の力を恃み、進んで事に當るの謂なり。

蓋し內より來る助は常に其の人を强うすれども、外より來る助は必ず每に之を受くる者を弱うす。彼の富貴の子に薄志者の多きは、幼きより起居・眠食共に他人の奉侍を俟つに慣れて、自ら彊むる力を鈍らしめたればなるべし。此の故に新井白石は河村瑞賢の好意を辭し、ドクトル、ジョンソンは贈物の靴を斥けて穢く古きを穿ちたりき。「貧苦・病苦

*一七〇九―一七八四。

に福音あり」といひ、「逆境は最も有爲なる者を卒業せしむる學校なり」といひ、「艱難は人を玉にす」といふ。いづれも人は全力を試錬せらるゝ機を重ぬるに及びて、はじめて其の本色を發揮するをいへるならん。古今・東西の一藝・一術に秀でたる人の傳を讀むに、名人・上手の名を少くとも其の一代に知られたる程の者は、其の修行期の若干ページを血の涙の歷史たらしめざるは無し。されば、彼の金翅鳥とかいふ鳥に佳き音を出さするためには、其の目に燒け針を刺し込むといふ話あるも、全くの拵へごとにはあらざるにや。

人生れながらにして才と不才とあり、又健康と病弱とあるは爭ふべからず。これ運命なり。されど、其の才をして大

なる用をなさしめ、其の健康を保全して長壽ならしむるが如きは人の力なり。力めて已まずんば、不才をも有用の材たらしめ、病弱をも活動に堪へしむるまでに鍛ひ成さんこと、望みがたきにあらず。人は宜しく人事を盡して天命を俟つべきなり。運命と境遇とが人を殺活することあるは事實なれども、機會を利用するに敏なる者は、自ら能く境遇を造るなり。（中學修身訓）

一八　海軍戰死者ヲ祭ル

東郷平八郎

海陸ノ戰雲已ニ散ジテ、滿都ノ和氣藹々タリ。童幼歡ビ迎ヘテ、六親門ニ待ツ。是、諸子ト生死ヲ共ニシタル將卒ガ大纛ノ下ニ凱旋セル頃日ノ光景ナリ。回想スレバ、諸子等ガ沍寒ヲ冒シ、炎熱ヲ凌ギ、勁敵ト戰フニ方リテヤ、戰局ノ前途ハ尚未ダ知ルニ由ナク、諸子ノ逝ク毎ニ、先其ノ忠死ノ榮ヲ得タルヲ羨ミ、我等モ亦必ズ諸子ニ倣ウテ君國ニ報ユルヲ期セリ。然ルニ、諸子ノ勇戰奮鬪ハ常ニ其ノ結果ヲ奏シ、皇軍戰フ毎ニ勝タザルコトナク、旅順ノ連陣十閲月ニシテ大勢ヲ定メ、日本海ノ鏖戰一擧ニ勝敗ヲ決シ、爾後海上敵影ヲ見ザルニ至レリ。是、固ヨリ無量ノ皇德ニ基ヅクト雖モ、又諸子ガ身ヲ外ニ忘レテ奉公シタルノ致ス所ナラズンバアラズ。今ヤ征戰其ノ終ヲ告ゲ、我等凱旋ノ將卒四顧歡喜ノ光景ヲ見ルニ當リ、諸子ト此ノ悅ヲ頒ツ能ハザルヲ懷ヒ、悲

喜交、至リテ、感慨言フベカラザルヲ覺ユ。然レドモ、帝國ノ今日アルハ卽チ諸子ガ一死ノ榮アル所以ニシテ、諸子ノ忠烈ハ永ク我ガ海軍ノ精神ト爲リ、帝國ヲ無窮ニ守護スベシ。茲ニ典ヲ擧ゲテ諸子ノ靈ヲ祭リ、聊カ懷ヲ陳ベテ、弔詞ニ代フ。尙クハ來リ饗ケヨ。

明治三十八年十月二十九日

聯合艦隊司令長官　東鄕平八郎

一九　「世界之無線電信」の著者に贈る

島村速雄

「世界之無線電信」御稾本御送附に預り候處、時節柄にもあり、且は御出版御急ぎの事と察し、緩々拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至に候へども、其處此處と拾ひ讀み致候ばかりにても尠からざる興味を覺え申候。

電信の、戰爭に至大なる影響を及し候事は疾く人の知る所にこれあり、今回の戰役に於ても、大山元帥が南滿洲一面に蜘蛛の網のごとく張りたる電信・電話線をとほして、日夕諸方面よりの情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して古今未曾有の大勝利を收め居られ候事は、誰も想像致し得る事と存候へども、東鄕大將が海上において目に睹ること能はざる電波を驅つて數十隻の艨艟を手足の如くに指揮せられをり候事は、一寸世人

の想像の及びがたき事かと存候。昨年數箇月の間、旅順口封鎖の節などは、大將は大抵常に同地より數十里の海面に在られたる事に候が、旅順港外に配置せられたる我が哨艦より無線電信により日夕敵の情報を受けられ候へば、端船の港口出入に至るまで殆ど手に取る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々の通報の如きも、大連灣碇泊の中繼船を經て、やはり電波の力により斷えず承知せられ、大將も之に應じ、また電波を介してそれ〴〵我が艦隊を指圖せられたりと申す次第にこれあり候。且此の無線電信は陸上電信線による通信の如く獨り發信者と受信者との間にのみ通じ

候にてはこれなく、電信機械を備へ居候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず時々刻々新しく且活きたる情報を卽座に承知致得る次第に候へば、長日月の間、困難なる封鎖勤務に於て全軍に些少の倦怠をも生ぜしめずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申候。他年若し當時各艦より發せる無線電信の一日分のみにても一讀致候はば、趣味津々たるを覺え申すべしと存候。而して我が海軍の無線電信をして右の如くに有效ならしめたることは、貴下が多年御盡力の功多きに居る事と只管敬服致居候。惟ふに本邦に於ても無線電信の事を研究

せる人士尠からざるべし。さりながら、時局の必要に迫られ、專心一意、學理と實驗とを併せて、貴下ほど十分に此の事を研究せる士は恐らくはまた他にこれあるまじく、而して今其の人の手によりて斯の學の好著述世に出で候事は、誠に科學界の幸福にして、定めて非常なる歡迎を受けられ候はんと今より期待致居候。殊に貴下が序文に於て、此の最も新しき科學の發明に係る巧緻なる機械を、最も古くより傳來せる大和魂を以て今はの際まで泰然として使用せし軍艦吉野無線電信係下士卒の忠烈なる事蹟を紹介せられたる事は最も會心の點にこれあり、ひとり小生が當時の事を回

吉野艦長佐伯閣。

想して亡友佐伯大佐も定めて地下に滿足致候はんと察し候のみならず、此の事蹟たるや、教育の注意によりては、科學の進歩が決して我が大和魂に何等の障礙をも與ふるものにあらざることを證明致候ものにて、識者の擧つて感謝すべき事と存候。抑、小生どもは日夜無線電信の恩澤に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解に苦しみ、卻て他の感想に馳せ候事も尠からず。「開戰以來我が四千餘萬の同胞が各其の分に應じて義勇公に奉ぜる至誠天に通じ、一種靈妙にして物質界の電波に比すべき正氣の波動を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應して、かく都合よく戰局を進

めをるにあらずや。而して其の氣の凝るや、恰も電氣の結んで雷電となれるが如く、或は奮激死に赴く決死隊となり、或は從容死に就く吉野電信係の如きものとなり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現しをるにあらずや。」などの感想を起し候事もしば〳〵にこれあり候。

餘事はさておき、貴著述に對し、序文御求に預り候處、これはとても小生のがらになき大役に御座候間、平に御斷り申上候。尤も此の俗文中に記載致候事柄にして何等かの御役に相立ち候ものもこれあり候はゞ、御隨意に御使用下さるべく候。まづは他に先だつて、貴著拜讀の光榮を得候事の御禮、且は昨年來度々の御懇書、殊に珍しき外國新聞紙の御惠贈に對し、何等の御挨拶をも申上げざりし闕禮の御詫を兼ね、右申述べ候。時下不順の候、益御自愛、斯の學の御研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ、「世界無比之無線電信」を我が海軍に貢獻せられんこと、切望の至に御座候。敬具。

明治三十八年五月二十五日夜、時々刻々「波羅的艦隊見ゆ」との無線電信を待ちつゝ軍艦磐手電燈の下に於て、

島村速雄

木村駿吉先生

（世界之無線電信）

二〇　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歴史上の各時代を通じてたぐひ稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙開第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせずと覺悟し、「法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは沙に黄金を換へ糞に米を代ふるなり」と喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天闊地獨立獨歩の大豪傑なりしが、さりとて、豪邁なる膽氣のみありて溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。

上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情時としては禽獸の末にまでも及びしことは後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

日蓮（東京帝室博物館藏）

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列なり、不惜身命の覺悟を以て上人と共にもろ〳〵の迫害を被れり。上人龍口にて斬られんとせし時は路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は

*北條時頼日蓮を相模の龍口に斬らんとす。子時宗時頼を宥む。乃ち死一等を減じて佐渡に流す。

深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛の情を湛へたり。就中「殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂をとらへて淨土に迎ふとも、ふりかへつて必ず殿と共に地獄に墮すべし」との意を述べられたり。その恩愛の濃かなること喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、ことに貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現はれ、夙に本化門下の龜鑑となれり。殊に晩年日本六十六箇國、島二つの内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日もかゝさず一日に一度は必ず攀ぢ登りて遙かに上人の故郷なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中にこれと比較し得べき美談あるか。

上人病あつくして甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に送る書中にも、この馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人をつけて候うては覺

束なく覺え候。罷り歸り候はんまで、この舍人をつけおき候はんと存じ候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會してこゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別々に織り成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲卽ち刺を織る絲なるにあらずや。（糒牛全集）

二一　西鄕隆盛ニ與フ

山縣有朋

山縣有朋頓首再拜、謹ンデ書ヲ西鄕隆盛君ノ幕下ニ呈ス。有朋君ト相識ル、コヽニ年アリ。君ノ心事ヲ知ル、マタ甚ダ深シ。サキニ君ノ故山ニ歸養セショリ久シク其ノ謦咳ニ接スルコトヲ得ザリシカド、舊雨ノ感豈一日モ有朋ノ懷ニ往來セザランヤ。圖ラザリキ、一旦滄桑ノ變ニ遭ヒテ、コヽニ君ト旗鼓ノ間ニ相見ユルニ至ラントハ。君ガ歸鄕ノ後、世ノ鹿兒島士族ノ暴狀ヲ議スル者皆曰ク、「西鄕實ニ其ノ巨魁タリ、謀主タリ」ト。然レドモ、有朋獨リ之ヲ斥ケテ、然ラズトセリ。而シテ今此ノ如シ。嗚呼復何ヲカ謂ハン。

然レドモ、ヒソカニ思フニ、事ノコヽニ至レルハ、蓋シ勢ノ已ムヲ得ザルニ出デタルモノニテ、君ノ素心ニハアラザリシナラン。若シ君ニシテ初メヨリ眞ニ異圖ヲ懷キシナラバ何ゾカヽル無名ノ軍ヲ、カヽル機ヲ失ヘル時ニ起サン。薩軍ノ今公布スル所ヲ見ルニ、罪ヲ一二ノ官吏ニ問ハントスルニ過ギズ。是果シテ擧兵ノ名ヲ得タリト謂フベキカ。佐賀ノ賊マヅ誅セラレ、熊本・山口ノ叛徒ツイデ敗レ、今ヤ天下ノ士民、漸クソノ自省ノ志ヲ立テントス。而シテ薩軍突如トシテコヽニ兵ヲ擧グ、是、果シテ擧兵ノ機ヲ得タリト謂フベキカ。君ノ明識ナル、豈之ヲ知ラザルコトアランヤ。

説者マタ曰ク、「天下不良ノ徒ハ西郷ノ山林ニ韜晦セシヲ奇貨トシ、コレニヨリテ功名ヲ萬一ニ僥倖セントスル念ヲ懷キ、ソノ辭ヲ巧ニシテ、ヒタスラ朝廷ノ政務ヲ讒誣シ、西郷ニ説クニ『君出デズンバ蒼生ヲイカニセン、君ニシテ義兵ヲ擧ゲナバ、天下靡然トシテ之ニ向ハン。』トノ旨ヲ以テセシナラン。西郷ノ卓識ナル、ソノ讒誣タルヲ洞察スルニ難カラザリシナルベシト雖モ、ソノ浸潤ノ致ス所、實ニ衆口金ヲ爍ス勢アリテ、知ラズ識ラズ、遂ニ事ヲ擧グルニ至リシナラン。」ト。聞ク者皆之ヲ然リトス。然レドモ有朋ヒトリ之ヲ斥ケテ然ラズトナス。何トナレバ、若シ君ニシテ眞ニソノ志アリシナラバ、單騎輦下ニ來リテ、從容トシテ利害ノアル所ヲ上言スルニ於テ、何ノ妨モナカルベケレバナリ。

*衆口鑠ル金積毀銷ル骨。

思フニ、君ガ多年育成セシ壯士輩ハ、初メヨリ時勢ノ眞相ヲモ知リ、人倫ノ大道ヲ履踐スル才識ヲモ備ヘタル者ナルベケレド、彼ノ不良ノ徒ノ敎唆ニヨリ、或ハソノ一身ノ不遇ニヨリ、其ノ不平ノ念ヲ高メ、遂ニ一轉シテ悲憤ノ念ヲ懷キ、再轉シテ叛亂ノ心ヲ生ズルニ至リシナラン。而シテソノ名ヲ問ヘバ則チ曰ク、「西鄕ノ爲ニスルナリ」ト。情勢既ニコヽニ至ル、君ガ平生故舊ニ篤キ情ハ、空シク之ヲ看過シテヒトリ餘生ヲ完ウスルニ忍ビザリシナラン。然ラバ、君ノ志ハ初メヨリ生命ヲ以テ壯士輩ニ與ヘント期セシニ外ナラザリシナリ。君ガ人生ノ毀譽ヲ度外ニ置キ、天下後世ノ議論ヲモ顧ミザルモノ、故ナキニアラズ。嗚呼君ノ心事、マコトニ悲シカラズヤ。有朋殊ニ君ヲ知ルコトノ深キガ故ニ、君ガタメニ悲シム心マタ甚ダ切ナリ。然レドモ事既ニコヽニ至ル、コレヲイフモ何ノ益カアラン。

顧ミレバ、交戰以來既ニ數月ヲ過グ。兩軍ノ死傷、日々ニ幾百ナルカヲ知ラズ。朋友相殺シ、骨肉相食ミ、人ノ忍ブベカラザルヲ忍ブ。而シテ戰士ノ心ヲ問ヘバ、共ニ寸毫ノ恨アルニアラズ。タヾ王師ハ兵隊ノ職務ノ爲ニ、薩軍ハ其ノ帥西鄕ノタメニ戰フトイフニ過ギズ。ソレ一國ノ壯士ヲ率キテヨク天下ノ大軍ニ抗シ、劇戰數旬、百折撓マザルモノ、既ニ以テ君ガ威名ノ實ヲ天下ニ示スニ足レリ。而シテ今ヤ君ノ麾下ノ勇將槩ネ死傷シ、ソノ軍威日々ニ衰ヘントス。

薩軍ノ遂ニ志ヲ成スコト能ハザルハ、既ニ明カナルニアラズヤ。君更ニ何ノ望ム所アリテカ、徒ラニ守戰ヲ事トセントハスル。若シ人ノ、「西鄕ハ事ノ成ラザルヲ知ルモ、暫クソノ餘生ヲ永クセンガ爲ニ、敢テ千百ノ死傷ヲ兩軍ヨリ出スヲ辭セザルナリ。」ト云フモノアラバ、有朋ソレニ向ヒテ何トカ答ヘン。

願ハクハ、君早ク自ラ圖リテ、一ハ此ノ擧ノ君ガ素心ニアラザルヲ明カニシ、一ハ兩軍ノ死傷ヲ明日ニ救フ計ヲナセ。嗚呼、天下ノ君ヲ議スル、實ニ極レリト謂フベシ。國憲ノ存スル所、自ラ然ラザルヲ得ズト雖モ、思フニ君ノ心事ヲ知ルモノ、ヒトリ有朋ノミニアラザラン。然ラバ何ゾ公論ノ他年ニ定マルナキヲ憂ヘン。故舊ノ情、有朋切ニコレヲ君ニ冀望セザルヲ得ズ。書ニ對シテ涕涙雨ノ如ク、言ハント欲スルコトヲ盡ス能ハズ。君少シク有朋ガ情懷ノ苦ヲ察セヨ。頓首再拜。

二二　城山の嵐

勝海舟

夫、達人は大觀す。
榮枯は夢か、幻か。
眞如の月の影淸く、
何を怒るか、いかり猪の
勇みに勇むはやりをの

拔山蓋世の勇あるも、
大隅山の狩くらに
無念無想を觀ずらん。
俄に激する數千騎、
騎虎の勢一徹に、

止り難きぞ是非もなき。　唯身一つを打捨てゝ
若殿ばらに報いなん。　明治十年の秋の末、
諸手の軍打敗れ、　うちつ、うたれつ、やがて散る
霜の紅葉の紅の　血汐に染めど顧みぬ
薩摩武夫のをたけびに、　打散る玉は板屋打つ
霰たばしる如くにて　面を向けん方ぞなき。
木だまに響く鬨の聲　百の雷一時に
落つるが如き有様を　隆盛打見てほゝ笑みつ、
「あな勇ましの人々や、　いざ諸共に塵の世を
脱れ出でんは此の時」と、　唯一言を名殘にて、
桐野・村田を始めとし、　宗徒の輩諸共に

煙と消えし益荒男の　心のうちこそ勇ましけれ。
官軍これを望み見て、　昨日は陸軍大將と仰がれて
君の寵遇、世の覺え　たぐひなかりし英雄も、
今日はあへなく岩崎の　山下露と消え果てゝ、
移れば變る世の中の　無常を深く感じつゝ
唯悄然と隊伍を整へ、　目と目を見合す計りなり。
折しもあれや、吹きおろす　城山松の夕嵐、
岩間にむせぶ谷川の　非情の聲も何となく
悲鳴するかと聞きなされ、　戎衣の袖をぬらすらん。

（海舟言行錄）

二三　我が家の富

德富蘆花

家は十坪に過ぎず、庭は唯三坪。誰か云ふ、狹くして且陋なりと。家陋なりと雖も膝を容る可く、庭狹しと雖も仰いで碧空を望む可し。

神の月日は此處にも照れば、四季も來り、風雨雪霰かはるがはる到りて、興淺からず。蝶來りて舞ひ、蟬來りて鳴き、小鳥來りて遊び、秋蛩また吟ず。靜かに觀ずれば、宇宙の富は殆ど三坪の庭に溢るゝを覺ゆ。

庭に一株の老李あり。春四月の頃ともなれば、青白き花開いて樹に滿つ。風ある日には青々と霞める空より白き花ちら〳〵と舞ひて、一庭須臾に雪を散らす。鄰家に花樹多し。風に隨ひて、飛花吾が庭に落つ。紅雨霏々、白雪紛々、見るがうちに、滿庭、花の衣を著く。仔細に見れば、桃の花あり、櫻の花あり、椿の花瓣あり、山吹の花あり、李の花あり。

庭隅に一株の山梔あり。五月闇鬱陶しき頃、香しき白花を開く。主も妻も無口なれば、此の花の吾が家に開くは宜なりけり。

老李の背後に、一株の碧梧あり。その幹亭々として些の邪なく、吾が如く直かれと敎ふるに似たり。これと手水鉢の側なる八角金盤とは葉廣うして吾が家の雨聲を多からしむ。李熟して白粉ふきたる琥珀玉の滾々と地に落つる頃は、與へて喜ばせん男の子一人欲しと思ふ心も起るなり。

つく〳〵ぼふしの聲に、世はいつしか秋に入りて、茶梅（サザンクワ）咲き、三尺ばかりの楓も紅に燃え出で、たゞ一株、前の家主の植ゑ殘したる黃菊も咲き出づ。名苑の花美しと云ふとも、秋のあはれ、閑寂の趣は卻て吾が庭の一枝にあるべし。蛻巖*の翁なりせば、「獨、憐細菊、近荆扉。」とや吟ぜまし。恥づらくは「海內、文章落、布衣。」とつゞくべき身にあらざることを。

屋後に一株の銀杏あり。秋深くして樹は金よりも黃なり。風の風起れば、其の葉翩々として翻り落つ。半夜夢さめて雨かと疑ひ、曉に起きて戶を開けば、庭は一夜に金色となりぬ。屋根も庇も手水鉢も、處として落葉ならざるはなく、紅葉さへ落ち添ひて、寸金と人は云ふなる錦を、吾は庭に敷きつめぬ。

木の葉落ち盡しては流石に淋しげなるも日影・月影いよいよ多くなりて、空を見、星を見るに障りなきはうれし。

（自然と人生）

*梁田蛻巖。明石藩の儒者。二三三～二四一七。

二四　人工の美と自然の美 その一

井上哲次郎

人の作爲せる美術の美は人工の美にして、山水の景色の如く人工を俟たずして存する美は自然の美なり。今人工の美と自然の美とを對照してこれを考察するに、人工の美は迥かに自然の美に優るものあり。かく言はゞ、人或はその

果して然りや否やを疑ふべし。請ふ少しく余が思惟する所を敍述せん。

自然界の情態を瞥見せよ。到る處唯佳境のみ之あるにあらず。平凡なる道路あり、平凡なる丘陵あり。かく平凡なるもの相集りて一の境遇を成し、毫も人の注意を惹くに足らざるもの少しとせず。然るに、尙之より甚だしきものあり。何ぞや。塵埃あり、汚物あり、不淨の下水あり、惡臭鼻を打ち、穢色目を遮る。而して卑賤の徒、其の間に往來して何等の見るべきものなし。かくの如きは、豈取りて以て美術の材料となすに足らんや。然れども、風景の佳なる處亦少しとせず。唯日本の佳景のみを數ふるも殆ど際限なし。

況や世界萬國の佳景をや。

然るに美術は、此等の佳景を擇んで之を寫出することを得るなり。又通常の景と雖も、僅に配合を異にすれば佳景となることあり。例へば荒廢せる庭園の如き、月色と梅花とを添へて、忽ち無限の趣味を加ふることなしとせず。曉光の如き、殘照の如き、飛雪飛雨の如き、鳥聲蟲聲の如き、皆境遇如何によりて、情緒を添へ來るものなり。杜*小山が句に「尋常一樣窗前月、纔有梅花便不同」と云へるも、亦此の邊の消息を洩すものなり。先に擧げたる平凡若しくは汚穢なる境遇と雖も、一夜の雪に埋められて銀世界を成し、家々の燈光紅色を吹くに際し、偶浮雲破れて月光を洩さば、其の光景必

*宋の詩人。

ず人目を眩するに足るものあらん。然れども、此の如き佳景は、常に之あるにあらず。唯時ありて現出せらるゝものなり。美術は此等の佳景を擇んで之を寫出することを得るなり。

之を要するに、自然界の佳景は方處と歳時とによりて之を異にすと雖も、美術に於ては唯此の如き佳景をのみ抽出する自由を有するなり。又作者の技倆如何によりては、種々なる佳景の粹を集め、打して一丸となすを得べきなり。彼の人事界の現象と雖も、離別・邂逅・悲憤等の如き殊に情緒の激發せる場合を擇びて之を寫し出すの便あるなり。之を要するに、人工は自然界に於て決して遭遇し得べからざる理想的の佳景を一幅の中に現出するを得べし。人工の美の自然の美に優る所以、以て知るべきにあらずや。

其の他、美それ自身の優劣以外に吾人の注意を惹くものなきにあらず。自然の美は各その局所に限らるゝが故に、往いて之を見るにあらざれば其の美を享受すること能はず。即ち瑞西の佳景を見んと欲せば瑞西に往かざるべからず。チロルの佳景を見んと欲せばチロルに往かざるべからず。其の他いかなる佳景と雖も、身親ら其の地に往くにあらざれば其の美を享受すること難し。但し人工の美はこれと其の選を異にし、運搬すべく又携帶すべきなり。繪畫に寫し出せる瑞西若しくはチロルの景は、吾人之を室内に懸け、

朝に夕に左顧右眄して其の美を享受するを得べきなり。これ固より美それ自身の優劣よりは寧ろ美を享受すべき方法の優劣に關するは言ふまでもなけれども、又人工の美が自然の美に對して一頭地を抜く所以なりと謂ふべし。

（巽軒論文二集）

二五　人工の美と自然の美　その二

井上哲次郎

人工の美は又吾人人類の意思力によりて製作せられたる産物なり。故に自然の美よりは迥かに吾人に親密なる關係あり。自然の美は吾人に先だちて存するものにして、も

と吾人に關係なきものなり。吾人が之に對するに當りて、吾人を喜ばしむることもあれど、亦吾人に敵することもあり。雪景の美に伴ふ寒さは肌膚に砭するが如く、電光の美に伴ふ威力は心胸を驚かすに足る。大海の風濤、巨嶽の雲霧、美は美なりと雖も、其の壯大の景、卻て恐怖心を生ずることなしとせず。然るに、人工の美に於ては、毫も此の如き痕跡あるを見ず。室内安全の處に於て、茶を喫しながら之を賞翫するを得べきなり。要するに自然の美は人工の美の如くに親密なるものにあらず。兒童の如きは、未だ天地山川の美を樂しむことを知らず、卻て自ら粗末なる圖畫を試みて之を樂しむこと、顯著なる事實なりとす。人の自然の

美を樂しむは、比較的成長したる後の事にて、已に自然の美を樂しむを知ると雖も、尙其の縮寫を懸けて之を賞翫するの安きに若かず。是に由りて之を觀るも、自然の美は人工の美に對して一籌を輸せざるを得ざるものあり。然れども、又一槩に論ずべからざるものあり。若し吾人が容易に名工の名作を得べきものならば、人工の美の自然の美に優ること論なしと雖も、吾人の希求を充たすべき名工の名作極めて鮮し。僅に之ありとするも、之を得ること容易なりとせず。果して然らば、人工の美を享受せんこと亦豈容易なりとせんや。但し凡工の凡作に至りては得がたきにあらず。然れども、吾人の希求を充たすに足らざるなり。此の點より之を言へば、人工の美と雖も、然く得易しといふべからず。唯自然の美に對して比較的に得易しといふべきのみ。

然らば、自然の美は到底人工の美に及ばざるか。然り。然りと雖も、吾人は自然の美に於て、人工の美が決して及び難きものあるを認容せざるを得ず。吾人は其の活動あるを謂ふにあらず、又其の音聲あるを謂ふにあらず。然らば何ぞや。他なし、其の壯大なる事是なり。試みに都門を出て海邊に至れば、白沙青松一點の塵もなく、長風面を吹き、濤聲耳を洗ひ、眼に映ずるものは水天一碧、頓に心胸を豁大にするに足る。若し夫、興津の如き、大洗の如き亂巖突起の處

に到れば、怒濤遠くより坤軸を捲いて來り、忽ち巖角を打ちて飛沫四散し、滿天の雪、流れて水晶の簾となる。其の壯快言はん方なし。或は又、富士若しくは御嶽の如き高山に登れば、白雲大麓を繞りて、身は卻て天半に懸り、眼界茫々、人生の蜉蝣を思ひ、世界の無窮を感じ、氣象頓に豁大なるを覺ゆ。若しヴェスヴィオ又は淺間の如き火山に登り、噴火口に接すれば、水火相戰うて炎煙空に漲り、其の勢の猛烈なる、殆ど人をして股栗せしむ。名工は固より如何なる壯大の景をも寫し得べしと雖も、繪畫は僅々自然の一小部分を縮寫せるものなるが故に、壯大の一點に於ては、到底自然其の物に比較すべくもあらざるなり。（巽軒論文二集）

二六　古人の名言

藤井紫影

底ひなき淵やはさわぐ、山川乃
淺き瀨よりそあだ波そなて。　素性法師

末つひよ海やなるべき山川も、
暫し木の葉よ下くゞるかり。　蘆庵

雨霰雪やみぞをとへだつれど、
落つればれなじ谷川よ水。　失名

ものいへば脣さむし、秋乃あぜ。　芭蕉

今日になりて、菊作らうや思ひけり。　二水

來年を來年をとて暮をにけり。　露川

氣を入らぬ風もあらうに柳ゝか。　失名

以上列擧せる和歌・俳句は槩ね俗意俗情のものにして、詩としての價値乏しきものなるは具眼者の首肯する所なれど、これらの歌句が一般國民の腦裏に深く印象せる所以は、何人も久しく思惟し感得して、言はんと欲して未だ言ひ得ざりしことを巧に言ひ現したるを以てなり。たとひ高雅なる文學的作品たるを得ずとも、通俗なる眞理の一面を道破したる功は沒すべからざるなり。

訓誡の意を含み、或は道義上の譬喩に供すべき詩歌・俳句が諺として用ひらるゝのみならず、偉人・傑士の語は直ちに當時の人口に膾炙し、永く後昆に傳誦せられて、俗諺と伍を同

(一)梁の忠臣。
(二)魏の武帝曹操、字は孟德。
(三)マセドン王。前三五六―三二三。
(四)ローマの大政治家。前一〇三―四四。

じうするに至る。孔・孟・釋迦・基督の金言の如きはいふも更なり、王彥章(一)が「豹死留皮、人死留名。」といひ、曹孟德(二)が「既得隴復望蜀。」といひ、アレキサンデル大王(三)が、波斯の大軍來り襲はんとするを聞き、自若として「一屠兒千羊を恐れず。」といひ、シーザー(四)が西班牙の太守に擧げられて赴任する途次、アルプ山下の一寒村を過ぎ、「かくの如き貧邑にも亦邑長の職を爭ふ者ありや。」と從者のいへるに對へて、慨然として「羅馬にありて人の下に立たんよりも、西班牙に於て人の上に立たん。大都の胥吏たらんより、寧ろこの寒邑の長たらんのみ。」といひしが如き、家康が五字、七字の箴「上を見よ。」「身の程を知れ。」の如き、一度偉人・傑士の口を出づれば、忽ち千萬人の間に傳誦

せられ、永く世の諺となりて滅びず。定家が「和歌に師匠なし」と教へ、芭蕉が之に倣ひて「俳諧に古人なし」と唱へたるが如き、前數者に比して通用の範圍稍狹しといへども、名人の一語が世上の諺となるに至りては、その揆一のみ。（俗諺論）

二七　國語と愛國心

上田萬年

わが日本國は一家族の發達して一人民となり、一人民の發達して一國民となりしものにて、神別・皇別・蕃別の名ありといへども、今日にては、總べてこれらの種別は全く鎔化し去られたり。これ實に國家の一大慶事にして、一朝事ある秋に當りて、われ〳〵日本國民が協同の運動をなし得るは、主としてその忠君愛國の大和魂とこの一國一樣の言語とをもてる大和民族とあるによりてなり。故に日本國民の義務として、この言語の一致と人種の一致とをば、帝國の歴史と共に一歩もその方向より誤り退かしめざるやう勉めざるべからず。かく勉めざるものは日本國を愛する仁者にあらず、また日本帝國を守る勇者にあらざるなり。

凡そ一人民が話す言語とその人民の性質との間には、最も入り組みたる關係あるものにて、その人民が一事物に對して感じ、或は考ふる總べての事は皆その言語に反射し出づるなり。故に「言語はその話す人の精神の上に生活する思想及び感情が外に出でて化身したるものなり」といふも、決

して不可なきなり。試に支那語を見よ、いかに仁義の道が彼等の間に行はれしかは、歴史を待たずして言語の上に明かなり。文人國に詩歌の語多く發達し、武人國に武人の語多く繁昌す。英語の商業に於ける、佛語の社交に於ける、獨逸語の理論に於ける、皆それ〴〵その人民の長所によりて發達したるものなり。

言語はこれを話す人民にとりては、恰もその血液が肉體上の同胞を示すが如く精神上の同胞を示すものにして、これを日本の語にて譬へていはゞ、日本人の精神的血液なりと謂ひつべし。日本の國體はこの精神的血液にて主として維持せられ、日本の人種はこの最も強かるべく、最も永く保存せらるべき鎖のために散亂せざるなり。故に大難の一度來るや、この聲の響くかぎり、四千萬の同胞はいつにても耳を傾くるなり、いづこまでも赴きて飽くまでも助くるなり、死ぬるまでも盡すなり。而して一朝慶報に接する時は、千島の奥も臺灣のはても一齊に君が八千代を壽ぎ奉るなり。

かくの如く言語は國體の標識となるのみにあらず、これと同時にまた一種の教育者いはゆる情深き母にてもあるなり。われ〴〵が生るゝやいなや、この母はわれ〴〵をその膝の上に迎へ取り、懇にこの國民的思考力とこの國民的感動力とを教へ込みくるゝなり。されば、この母の慈悲は誠

に天日の如し。苟もこの國に生れ、この國民たり、この國民の子孫たるもの、誰かこの光を仰がざるべき。

言語の上には、われ〳〵が心中に一日も忘れかぬる生活、とに人生の神代ともいひつべき小兒の頃の記念が結びつき居るものと知るべし。われ〳〵が幼かりし頃、終日の遊に疲れ果てゝ、すや〳〵と眠に就かんとせしをり、母君はいかに優しき聲にてねよとの歌を謳ひたまひしか。頑是なき子供心に、わるふざけなどしてうち迴りし時、嚴しき父君はいかにおごそかに教訓を垂れたまひしか。さては夏の日ざかりに鄰家の樹に攀ぢて蟬を捉へたる、あるは春の麗らかなる野邊に友だちと紫雲英などを摘みあるきたる、總べて當時より用ひ來れる言語は、當時の人名、當時の地名と共に何ともいはれぬ快感をわれ〳〵に與ふるなり。次には小・中學校の言葉、次には學生の言葉、あるひは市民としての言葉、あるひは職業により、階級により、地方によりての言葉等、皆それ〴〵の生活をこの上に反映す。故に外國にて人となりしか、或は外國人の學校にて外國語の教育のみを受けたる人ならざるかぎりは、この言語の恩澤を蒙り、この言語に感謝の意を表せざる者はなかるべし。

されば國民がその國語を尊ぶことは一の美德にして、偉大なる國民は必ずその自國語を尊び、決してこれをおきて他の外國語を尊重せず。情の上より自國語を愛し、理論の上

よりその保護改良に從事し、以て眞正の國民を養成せんことを務む。現今の獨逸の如きはその一好例なり。

凡そいづれの國を問はず、苟も國家の觀念の上よりその一員たるに愧ぢざる人物の養成を以て目的とする以上は、まづその國の言語、次にその國の歷史、この二つを蔑にしては、決してその功を收むること能はず。これ國民たるものゝ須臾も忘るべからざることなり。（國語のため）

中學國文教科書卷五終

文部省檢定濟
大正元年十二月廿四日　中學校國語科教科書

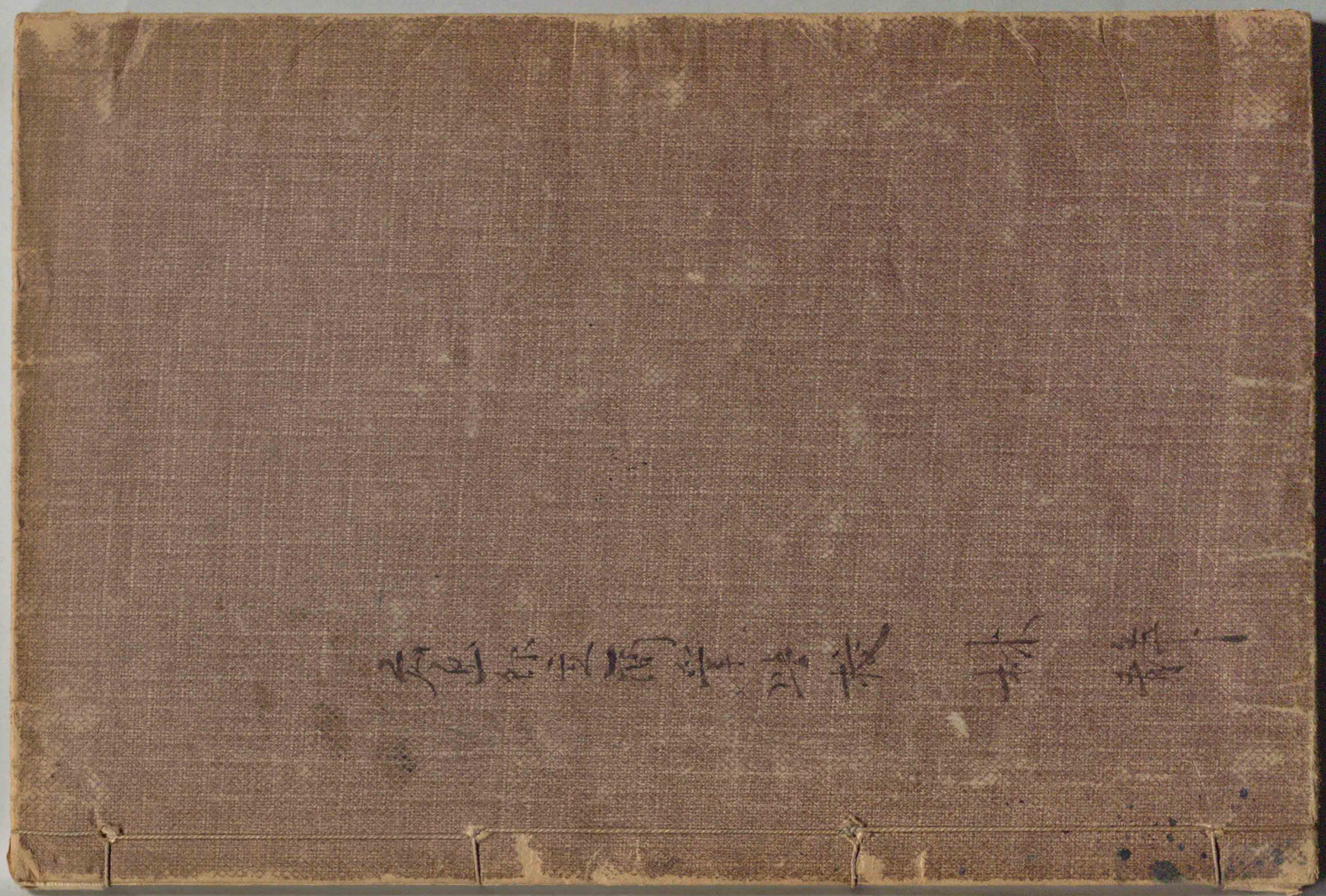
明治三十九年十月十五日印刷
明治三十九年十一月十八日發行
明治四十四年一月廿八日修正四版印刷
明治四十四年一月廿八日修正四版發行
明治四十五年二月廿三日修正六版印刷
明治四十五年二月廿六日修正六版發行
大正元年十二月二十日修正八版印刷
大正元年十二月廿三日修正八版發行

明治四十年一月八日訂正再版印刷
明治四十年一月十一日訂正再版發行
明治四十四年十二月十二日修正五版印刷
明治四十四年十二月十五日修正五版發行
大正元年十月二十七日修正七版印刷
大正元年十月三十日修正七版發行

中學國文教科書全拾册
定價一圓三拾錢　卷一～三各金三拾錢　卷四～五各金二拾五錢

著者　東京市小石川區高田老松町五十二番地　吉田彌平
編者　東京市神田區裏神保町六番地　上原才一郎
發行兼印刷者　東京市神田區裏神保町六番地　光風館書店（電話本局二千三十九番　振替口座東京三二七番）
發行所　大阪市東區淡路町四丁目四十二番地　大阪寶文館
關西專賣所　大阪市東區淡路町四丁目四十二番地　大阪寶文館

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候に付萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直ちに御送附可致候

東京秀英舍第一工場印刷